聖教調査におけるデータの整備を巡る問題

――「念仏宗僧運覚」・書誌情報を中心として――

宇都宮 啓吾

1　はじめに

天野山金剛寺に所蔵される経典・聖教群の本格的な調査については、平成十二年度より四ヶ年に亘る「金剛寺一切経の基礎的研究と新出仏典の研究」（日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (A)(1)）に始まり、この度の研究に至っている。

稿者は、これらの調査・研究において、主として聖教研究や訓点資料研究の立場から、金剛寺に所蔵される一切経・聖教群のデジタルアーカイブ化の問題について担当してきた。前稿（前掲科研費報告書「金剛寺一切経のデジタルアーカイブ化について」）においては、主として、金剛寺一切経四千数百巻のフルデジタルアーカイブ化という、全体として十二万コマ、容量にして七五〇ギガバイトを超えるデジタル撮影と、それに伴うデータ転送やバックアップを行なうためのネットワークの構築､更にはそのデータの保管と公開を巡る問題を中心として述べてきたところである。

このような本格的なシステムの構築に基づく聖教群のフルデジタルアーカイブ化の試みについては、未だ、他所においてはその例を見ず、現在においても、本科研の調査がこの分野においては先駆的な位置にあるものと思われ、今後は、前回の科研並びに今回の科研で行なわれたシステムの改良が更に進められることが望まれる。

前稿では、このようなシステム構築の問題を主として取り扱ってきたが、本科研においては、聖教調査も主たる対象の一つでもあり、聖教調査において望まれるデータの整備の問題について述べてみたい。

2　聖教調査におけるデータの整備の必要性

聖教とは、上川通夫氏の定義にもあるように、「寺院社会内で教義・行法に関して記録したもので僧尼の修学や宗教活動の実践に際して活用され、かつ師弟間における原本授受または書写伝授によって法脈継承を根拠づける文献」[①]であり､個別に独立して存在するものではない。つまり、それぞれの聖教は教学的背景のもとに存在しており、聖教調査における聖教の形成過程を含めた全体像の把握は重要になるものと思われる。

このような把握は、聖教調査における調書の作成を通して、また、調査員相互の情報交換を通して、最終的に至るものであるが、全くの予備情報も無く進めていくのでは効率の面でも、また、検討の詳細さという点でも問題の存するところである。

そのため、聖教調査において求められるべきデータの整備について、デジタルアーカイブ化という視点から、覚書ながら、その若干を述べることとしたい。

3　聖教調査におけるデータベースの必要性―「念仏宗僧運覚」を手懸かりとして―

上記のことを考えるために、まず、稿者の考察を手懸かりとした以下の例を挙げて、検討することとしたい。

金剛寺一切経の中には、『無量清浄平等覚経』巻下に次の如き奥書が存する。

保延五年九月二日巳時奉書□　念仏宗僧運覚　願以書写功　必為往生因　普法界衆生　生西方浄刹

この奥書の中の「念仏宗」という記述がその早い例（保延五年：1139 年）として仏教史学の点で注目され、伊藤唯真博士は法然同法集団に関する文脈の中で、その早い例として、次の如く述べている[②]。

念仏宗の語は、すでに永観の念仏義に関連して使われているが、また、保延の頃、浄土教徒で念仏宗を名乗る僧も存在した。

そして、この「保延の頃」の注に「天野山金剛寺に次の後記をもつ『仏説無量清浄平等覚経』下が蔵されている。」として、前掲の奥書を示されている。

この「念仏宗僧運覚」がどのような人物であるのか、その解明が聖教調査においては必須の課題となる。

「念仏宗僧」という記述からは浄土教系の僧侶がまず想起されるところであるが、東寺本「天台血脈」や『諸嗣宗脈紀』の如き、主要な天台系の血脈類を記載する文献において「運覚」の名を見出すことが出来ない。

①そこで、調査の範囲を広げ、聖教類において「運覚」の名を求めるならば、石山寺蔵『等目菩薩経』巻下（石山寺一切経　第 20 函 58 号）に次の如き例が確認される。

「保延五年十一月廿二日酉時奉書写畢／念仏宗僧運覚」（見セ消チ符号による削除）
　願以書写切　必為往生因
　共結縁之人　生西方浄刹
　　「一交了」（別筆）

本書の奥書は見セ消チ符号によって削除の旨が記されているが、こういった例は伝領者が前の伝領者の識語を削除する等の要因が考えられ、この見セ消チ符号の存在を以てこの例を否定する必要はないものと思われる。本書には、その素性を窺わせる記述やヲコト点の類が存しないが、その伝来から考えて真言宗系統と考えられる。そして、この例は『仏説無量清浄平等覚経』下と同じ保延五年の書写であり、同一人物である可能性が存する。

②また、同時期における他の聖教や経典類からもこの運覚の名を求めるならば、次の如く、その名を見出すことが出来る。

○『金剛王菩薩儀軌』（保安三年（1122））　醍醐寺蔵

　杲運之所持也、

　保安三年四月廿六日書写了、比校了、運覚　『同日移点了、』

「天治二年正月五日奉読三密房阿闍梨了、　同時伝受高野智処房」

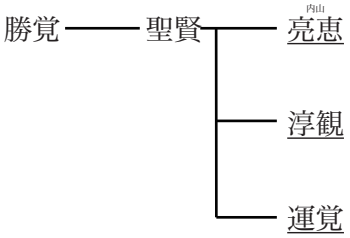
○『瞿聖壇多羅経』（大治二年（1127））東京大東急記念文庫蔵

　　大治二年十二月十三日未時書写了、運覚　『交点了、』

願以書写功　必為往生因　共法界衆生　生西方浄刹

これらは、孰れも真言宗系統のものであり、また、始めの『金剛王菩薩儀軌』の奥書からすれば、高野山との関わりも窺われるところである。

③そして、上記のような例から考えるならば、運覚は真言宗系統の僧侶の可能性が窺われ、真言宗系統の血脈の点からその名を調べるならば、醍醐寺蔵『伝法灌頂師資相承血脈』に運覚の名が真言宗小野流の金剛王院流の中にその名が確認できる。



④また、平安時代の古文書の集成である『平安遺文』も検索するならば、次の如く、大治四年（1129 年）二月九日の「僧運覚注進状」（保坂潤治氏所蔵文書）の中にその名が確認でき、上記と同一人物の運覚と考えられる。

　浄法院事

右、運覚者、先師明算大威儀師之舎弟也、門弟之中、運覚一人為親昵之弟子、因此万事付嘱由、常被示其旨者、房中貴賤上下、皆以知存、加之、已申達　殿下畢之由、所被語也、

この記述によれば、高野山中院流の祖である明算の弟子に運覚の名の見えることが窺われる。

⑤上記の如き例から、真言宗小野流の僧侶に運覚の名が確認された。更には、前掲の石山寺蔵『等目菩薩経』巻下の例の存在を踏まえ、真言宗小野流においても「念仏宗僧」と名乗るような教学的環境が存したのか否かを検討するため、真言宗系統の聖教類において「念仏宗」といった記述を調査してみる。

その結果、「念仏宗」の呼称が石山寺蔵『千手経述秘巻』巻上（校倉聖教第 17 函第 44 号　保元元年：

1156年）の中に確認された。

保元々年八月十四日於勧修寺西明院住房書写了、 願以書写□必□…□生因　遂生安楽国　還引□群生　念仏宗朗寵

この奥書の「朗寵」は、文泉房朗澄（1131～1208）と称される石山寺の学僧であり、理性院流祖の賢覚の付法である淳観（檜尾流の祖かともされる。前掲③の血脈を参照のこと。）に金剛界次第を承け、内山真乗房亮恵には諸尊法を承け、また、大法房実任より伝法灌頂を受けた人物である。また、本書には、真言宗小野流で使用される東大寺点が使用され、朗澄が真言宗小野流の僧侶であり、また、本書の訓読自体もその流のものであることが確認できる。そして、このような人物が自らを「念仏宗」と名乗っていることには注目される。即ち、「念仏宗僧」との名乗りが、真言宗小野流においても存していたことが確認できる点である。そのような教学的環境を考えるならば、「念仏宗僧運覚」を今までの検討の如く、真言宗小野流の僧侶として捉えることは可能と思われる。

⑥そして、運覚と朗澄とは同時代の人物であり、また、どちらも真言宗小野流の僧侶であり、運覚は金剛王院流として亮恵と共に聖賢より伝法灌頂を受け（前掲③の血脈を参照のこと）、その亮恵より諸尊法を学んだのが朗澄であり、この亮恵を介して二人は近い位置にあることが知られる。即ち、真言宗小野流、とりわけ、彼らの周辺においては「念仏宗」を称する教学的な環境があったものと考えられ、このような点から、金剛寺蔵『無量清浄平等覚経』巻下の「念仏宗僧運覚」を真言宗系統の僧侶と比定したところである。この点は、金剛寺自体が真言宗系統の寺院であり、また、金剛寺一切経も南都や真言系統との繋がりがあることからも首肯されるものと思われる。

⑦以上のことを踏まえるならば、運覚の名は更に、『本朝新修往生伝』第二十七話「沙門運覚」の中にも確認され、その記述の「醍醐寺之住侶」（前掲③、運覚が金剛王印流を承ける真言宗小野流の僧侶であること）・「阿闍梨聖賢之弟子」（聖賢は前掲③の血脈を参照のこと）は今までの検討と一致しており、金剛寺蔵『無量清浄平等覚経』の書写者が「往生伝」中の運覚その人であるものと考えられる。その点では、『後拾遺往生伝』巻中に記載される迎接房経源の加点した真福寺蔵『妙法蓮華経論優婆提舎』が現存する如く、「往生伝」中の運覚の書写本が本検討によって現存することが確認できる点でも興味深いものと思われる。

沙門運覚者。醍醐寺之住侶。阿闍梨聖賢之弟子也。齢在少年。学通三論。兼習真言。願曰。如来滅後二千余年。正像時過。遺教欲滅。当于此時。宣弘仏法。自書一切経。其後三十年。且書二千巻。又三時行業。多年不怠。康治二年春二月日。行法如恒。日中時終。忽払房中。殊整衣服。招集同行人。相語曰。命終時至。為我宜誦尊勝陀羅尼。又唱阿弥陀宝号。以助護浄土行儀。満座［虫損。内本（内閣文庫本）］悲感。一如其言。仏舎利前移座。端坐称念弥陀。手結定印気絶。

（岩波思想大系本による。但し、底本の原本確認は行なっている。）

この『本朝新修往生伝』の記述によれば、運覚は康治二年（1143）に入寂しており、その一生の中で一切経の書写とその後に二千巻の書写を行なっていることが知られる。金剛寺蔵『無量清浄平等覚経』の書写時期は保延五年（1139）であることから、此書は運覚の晩年の書写で、一切経書写完了後の二千巻書写のうちの一つであることが知られる。

以上、運覚の素性や院政期の真言宗小野流における教学的な有り様としての「念仏宗」といった問題は真言宗系統における浄土教学の中で考えるべきものであり、前掲の伊藤博士の御論の如き文脈とは別に考える必要が存するものと思われ、今後の検討に待ちたい[③]。

そして、このような分析は、

①②⑤　聖教の奥書の分析
④　古文書の分析
③　血脈の分析
⑥⑦　総合的分析

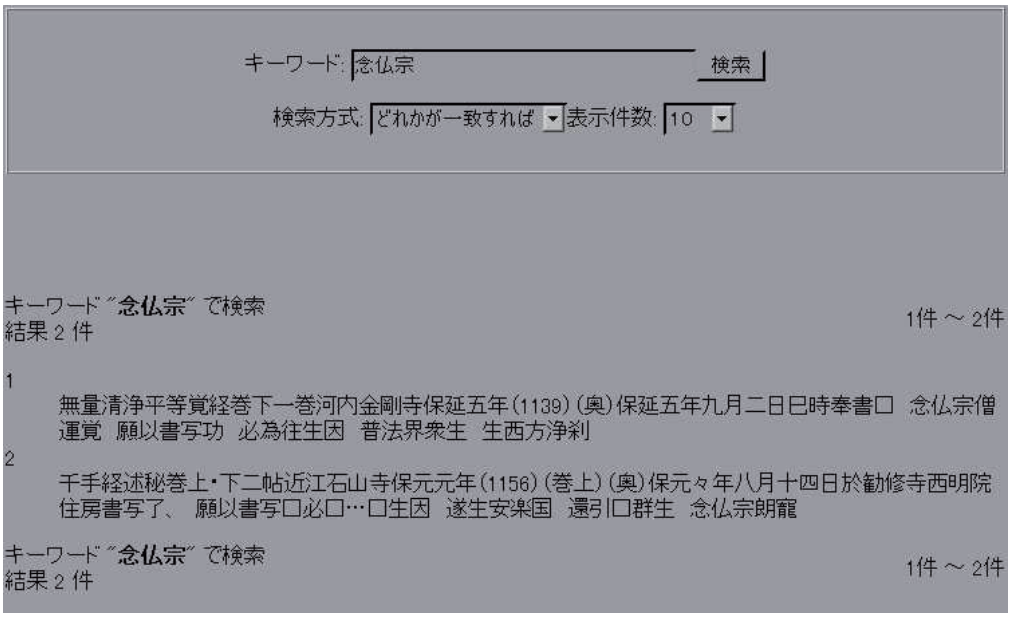
ということを行なった結果として得られた知見である。

④については、近年、『平安遺文』の CD 版が公開され[④]、また、東京大学史料編纂所の HP[⑤]においてもこの『平安遺文』データベース公開され、金剛寺においてもインターネット環境さえ整っているならば、検索が可能となる。

その一方で、①②⑤の聖教の奥書のデータについては、従来より、『平安遺文』題跋篇や各種聖教調査における奥書集成の公開によって検索が可能とはいえ、その多くは未だ全文検索が可能な状態ではなく、そのデータベースの総合的な公開が期待されるところである。

稿者は、試験的ながら、研究に資するべく、自身の HP において聖教奥書データベースを公開してきたところであり[⑥]、平安時代の聖教・経典類の約 3000 点を超える奥書類の検索を可能としている。

今回の分析に際しても、下図の如く、「念仏宗」というキーワードによって、金剛寺蔵『無量清浄平等覚経』巻下や石山寺蔵『千手経述秘巻』巻上が検索される。



現在のシステムはCGIを利用したものであるため、データの容量に1メガバイトほどの制限が存し、今回の調査に基づく金剛寺聖教の奥書もデータとして加え、また、今後の充実を考えるならばシステムの変更を必要とするが、現在公開されているデータによっても大まかな情報を得ることは可能であり、聖教調査においてはネット環境さえ整うならば、諸所のデータベースを活用することが望ましく、その一つとして、稿者の聖教奥書データベースも活用されることを期待したい。

また、③については、血脈類の公開とそのデータベースが期待されるところであり、更には、⑥で検討した如く、運覚と朗澄とは内山真乗房亮恵を介して非常に近い関係にあることが知られた。そのため、血脈のデータベースの作成に際しては、こういった複数の系図を横断的に検索し、尚且つ、それらの系図を繋ぐ人物を介した分析の可能なシステムの構築を進めているところである。

この点については、既に、以下のような論文を公にしている。

○冨金原賢次・須方嘉彦・森本光洋・宇都宮啓吾・森川弘信・田中猛彦・中川優「関係データベースを用いた平安・鎌倉時代僧侶検索システムの構築」(『研究報告』ソフトウェア工学　2002年3月 Vol.2002 No.23)

○田中猛彦・冨金原賢次・宇都宮啓吾・中川優「平安・鎌倉時代を対象とした僧侶データベースシステム」(情報知識学会誌, 2003, 13(3))

○田中猛彦　冨金原賢次　宇都宮啓吾　中川優「平安・鎌倉時代を対象とした僧侶データベースシステム：概要とその後の展開」(情報知識学会誌, 2004, 14(3))

このシステムも、インターネット上での公開を予定している。

以上、稿者の考察の一つとして行なった金剛寺蔵『無量清浄平等覚経』巻下の奥書の分析と、それに伴って必要とされるデータの提示に基づいて、聖教調査におけるデータベースの整備の必要性を指摘した。

このことから窺われることは、聖教調査におけるインターネット環境の整備と、必要とされるデータの公開に相応しいデータベースの構築ということになると思われ、そういった視点から、最も必要とされる聖教データベースと血脈（系図）データベースの必要性について、ここでは指摘したところである。

4　調書作成に伴うデータの蓄積とその公開―書誌情報を手懸かりとして―

聖教調査においては、何より均質に十分な調書を取ることが必要となる。その意味では、調書作成に際しては、調書作成者の共通の理解として持つべき知識やデータの蓄積が望まれるところである。

調書においては、一般に、以下の如き項目が取り上げられ、本調査においても同様である。

[題名] 外題・首題・尾題・他

[完本と欠本の別] 完本と欠本の別　残欠・後補の有無など

[法量] 表紙の寸法（縦・横の長さ）・丁数／巻子本の場合：第二紙の縦・横の寸法・一紙毎の長さ・全長・紙数

[料紙] 楮紙・楮打紙・楮斐交紙・斐紙などの別／白・染紙（黄檗・丁子・他）

[刊本・写本の別] 写本・刊本（宋版・高麗版・元版・明版・和版などの別）

[書写・刊行年代]

[装幀]

[界線] 線種（薄墨界・押界・他）／第二紙の行数（一行の行数）／界高・界巾の寸法

[印記]

[版刻者・書写者]

[表紙] 有無／原・旧・後補・新補の別

[見返し] 共紙・その他

[奥書]

[訓点] 有無・訓点の色・訓点の実態（仮名・ヲコト点の種別　他）

[備考]

[保存状態]

これらについて、データ化に関わると思われるものを指摘しておきたい。

４・１　[題名]・[完本と欠本の別]

一般に、諸寺院における大量の経巻や聖教には錯簡や散逸、僚巻の別置、重複や断簡のみの伝存とその散乱等が存し、それらを整理する必要が存する。また、聖教によっては虫損や鼠害によって断簡となったものや錯簡の存するものもあり、それらが何れの経典であるのか、又、正しい順序であるかどうかを確認することも必要となる。こういった場合、一切経においては、コンピュータを導入して『大正新脩大蔵経』テキストデータ（特に、台湾電子仏典協会のデータを活用した）からの検索による確認作業を行なったが、『大正新脩大蔵経』に載録されていない儀軌類等の聖教類や記録・作法等に関するものなど、聖教調査では、題名等が容易には特定し難いものも存する。例えば、『覚禅鈔』や『阿娑縛抄』の如き、大部な図像や記事を記載した資料の一部を書写したものやその残欠本の場合、検索自体も困難であり、また、一部分のみの書写本か残欠本かの判断が困難な場合も存する。そのため、今後とも経典・聖教類に関するテキストがデジタルデータとして公開されることが必要となる。

４・２　法量

調書作成における基本として計量される法量にも、そこには大きな意味が存する。高橋正隆氏は、滋賀県下に所蔵される『大般若波羅蜜多経』およそ三万七千巻に基づく調査結果から、次の如きことを指摘されている。⑦

「巻経の一紙の横の長さは、平安時代では五六センチから五三センチ程度、鎌倉時代では五〇センチから四六センチ、中には四二センチ程度のものが多い。」

「折本装でもって、いまに多く伝えている経巻は、半葉五行の小巾の折本である。この折本の姿は宋版一切経の影響をうけて成立したものと思われる。小幅の折本を確認できるのは、もっとも早い時期の佐久奈度神社所蔵の大般若経である。宝治三年から建長元年(一二四八)の識語を持つ経巻であったが、この後に折本に装丁し、金字でもって題簽を書いた旨を記録している。」

この指摘は、滋賀県の『大般若経』に基づくものであり、経典や聖教全般に同様のことが言えるかどうかは今後とも検討して行く必要が存するが、一紙長の傾向から同時期の経巻か否かの判定材料とすることもあり、このような各時代ごとの法量に基づく時代性との相関性については、データを蓄積することによって検討していくことが必要になるものと思われる。尚、金剛寺の一切経においても平安時代の料紙については、五〇センチを超えるものが多く、相関性についての参考資料になるものと思われる。法量については、前科研報告書並びに本報告書の当該項目を参照されたい。

４・３　[料紙]・[訓点]

聖教のデジタルアーカイブ化の問題として、経典の本文内容のみの確認あれば「読める」レベルとして 500 万画素もあれば十分であるが、訓点までをも明確に解読し、場合によっては「別筆」の判断をも行なうというレベルを求めるのであれば、今回の調査において使用されたデジタル一眼レフカメラ、NIKON　D200 の如く、1000 万画素を超えるレベルのものが求められる。前科研の当初に使用していた NIKON　デジタルカメラ D1（274 万画素）から NIKON COOLPIX5700（570 万画素）を経て、本科研では NIKON　D200 に至ったが、画質の向上はまさに大きなものであった。聖教調査の撮影に何を求めるか、1000 万画素を超えるとなれば、１コマあたりのデータ量も大きくなり（D200 の非圧縮の RAW で 1 コマあたり約 15.8MB：経巻 1 巻で約２５コマとして、一巻の撮影で約 400MB)、それに伴う保存メディアや HDD の容量も大きなものが要求されるが、訓点や料紙の風合いまでをも撮影するとなれば現状においては、このレベルでの撮影が必要となる。

このような一般的な撮影のみならず、聖教調査においては特殊撮影の必要性が起こる場合も存する。

そのような例としては、角筆文献の撮影や調査が挙げられる。訓点（ヲコト点等）自体が調査において見逃されがちであるが、その最たるものに角筆による書き込みがあると思われる。

稿者の経験においても、角筆文献の実際を見たことが無い調査者の場合、その多くが見過ごされているように思われる。角筆文献を調査する場合、その有効な機材として角筆スコープ⑧が開発され、これを活用した報告も従来より多く存する。ただ、側聞したところでは角筆スコープの制作は、その注文が 10 台を超えた時に行なわれるとのことであり、欲しい時にすぐ入手可能とは言いがたい面が存する。一方、稿者は角筆調査や料紙の表面（打紙加工の様子等）の検討には､LED 照射器（美舘イメージング:MSPT-12G（緑色 LED 集光照明）Peak 520nm）⑨を用いている。本来は、警察鑑識用の蛍光式指紋検出や、実体顕微鏡の蛍光試薬励起用光源として使用されているものであるが、LED 光線であるために他の光線と比べて対象を痛めず、また、光線の色が緑色であるために、部屋の明かりを落とすことなく角筆の書き込みの識別が可能であり、また何より、本体の重量が 170 グラムと軽く、オプションの電池ボックスを用いることで携帯性に

も優れ、自由な角度で確認することが出来る。（場合によってはクリップスタンドでの固定も可能。）

また、金剛寺一切経や聖教類にも存する白点資料の調査方法については、別稿で述べたことがある[10]。

その他、料紙の分析を目的とした透過光による撮影や顕微鏡撮影、さらには聖教のビデオ撮影や調査手順のビデオ撮影等、聖教調査においてはその撮影データを共有のものとすることによって、料紙や聖教の分析に大いに資するところである。稿者自身は、備忘的な使い方ながら、顕微鏡撮影については「DinoLite Digital MicroScope」を使用している。1/4 インチ CMOS センサーであるため、それほど大きな画像は望めないが、倍率としてはおおよそ 20 倍と 200 倍とでの撮影、並びにコンピュータに接続してコンピュータ側で画面を映し出したり撮影も可能であり、料紙における楮紙・楮打紙・楮斐交紙・斐紙などの別が容易にしやすく、また料紙のサンプル画像を残すことも可能である。この点は、料紙の材料の問題のみならず、漉返紙についても当てはまり、所謂「灰褐色」の料紙の場合には容易に漉返紙であることが明らかであるが、漉返紙もその制作過程で丁寧に洗われた場合には素紙とあまり変わらない色となっている（但し、紙の柔らかさや表面の繊維の立ち具合は異なる）。しかし、顕微鏡撮影をしてみると繊維の内部に墨が入り込んでいることで漉返紙であることが確認される場合も存する。こういったデータの蓄積は調書作成において有効であるとともに、将来的にも有益であろう。

以上、調書作成におけるデータの整備、また、データの蓄積として望まれるものの若干を列記してみた。聖教調査においては、そこに記載された内容のみならず、その「モノ」として語る部分を如何にすくい上げるかが重要である。その意味では、東京大学史料編纂所で公開されている花押データベースの如き、花押や印記のデータベース等、期待されるデータは多種多様である。

聖教調査に携わる者が、必要とするデータを積極的に発言し、また、その開発を求めることも必要になるものと思われる。

5　LaTeX による組版の問題

上記の如く、聖教それ自体に関するデータの整備の問題について述べてきたが、最後に、聖教に関する内容を印刷物として組版する場合の LaTeX の問題についても述べておきたい。

古典籍の翻刻・出版に際しては活版印刷から電算写植へという移行に伴って、その技術面・コスト面から大きな困難が起こり、そのような点から、聖教調査の成果公開に際して研究者自身による版下の作成が試みられ、そこに生じてくる問題を如何に解決していくかということが論じられるようになってきた。その試みの一つとして、組版用のソフトウェアである LaTeX に注目した論文が訓点語研究の立場から金水敏氏によって提示され[11]、訓点語研究や聖教調査の組版における一つの標準が提示された。

そのような結果、

○金水敏氏による訓点資料用のスタイルファイル（kunten2e.sty）

○藤田眞作氏による漢文「kanbun パッケージ　訓点文マクロ」・「sfoikomi パッケージ　大慈恩寺三蔵法師傳式追い込みマクロ」・「sfsyoten パッケージ　声点を含む書き下し文の組版」

○堀田耕作氏による今昔文字鏡（（株）ｴｰｱｲ・ﾈｯﾄ　文字鏡研究会）ﾌｫﾝﾄを使用するｽﾀｲﾙﾌｧｲﾙ（mjfonts.

sty）

○文字鏡研究会配布による今昔文字鏡ﾌｫﾝﾄを使用するｽﾀｲﾙﾌｧｲﾙ（mojikyo.sty）

○ tDB 氏作成による系図マクロ

等が作成され、訓点資料や聖教類のような非常に困難な組版が可能となり、稿者自身も、その問題について言及したことがある[12]。とは言え、聖教類の書写やその形式は千差万別であり、その都度、個別にスタイルファイルやマクロを作成する必要が存する。

例えば、訓点の加点時期をする大きな手懸かりとなる踊字（二字の繰り返し符号）の場合、その踊字の起筆位置が第一字目の下部から始まる場合は院政期頃の加点、起筆位置が第二字目の右肩から始まる場合は鎌倉時代初期頃の加点と言った具合に差異が存し、組版においてもそのような再現が期待される。例えば、このような例は、金剛寺蔵『大乗起信論』においても存し、そこでは、右の如く、第二字目「ハ」の右肩から踊字の起筆位置が始まる形式となっている。このような場合には、以下のように記述している。

\ukun{ 数 }{ シハ \kern-1zh\raisebox{0.4em}{\scalebox{2.5}[1]{ く }} ノ }

尚、この記述は、二重下線部の数値を減らせば減らすほど踊字の起筆位置が上の位置に移動し、一重下線部の数値を増やせば増やすほど踊字は訓より右に移動する。

このような形式によって、訓点の踊字の微妙な位置が再現される。

こういった細かな記述は、例えば、左の如き補入符号も必要である。この部分は以下のように記述される。

\scalebox{0.2}[0.5]{\rensuji[c]{()}}

このような記述については、従来のスタイルファイルには掲載されていない。聖教の表記をできるだけ再現しようとすればするほど、新たな記述が必要となり、こういった情報を公開、共有することで LaTeX の導入が容易になるものと思われ、そういった場を作ることも必要になるものと思われる。尚、稿者は、自らの HP において、新たな記述を行なう度にその記述を公開している。

7　おわりに

以上、本稿においては、未だ途中経過ではあるが、聖教調査におけるデータの整備を巡る問題について述べた。これらは学問領域を超えた学際的な試みやチームの連携の上で成り立つものである。

そして、様々な着眼点の必要性や膨大な作業故に、作業工程における技術的な洗い出しとその問題解決の方策が常に追求されるべきであり、本稿ではその試みの一端を概括的に述べたに

過ぎない。しかし、今回の試みが今後行なわれるであろう新たな聖教調査におけるデジタルアーカイブ化の叩き台とでもなることができれば幸いである。幅広い分野からのご批正・ご指導をお願い申し上げる。

【注】

① 上川通夫「中世聖教史料論の試み」(『史林』79/3　H8)

② 伊藤唯真『聖仏教史の研究　上』第二部第四章第一節（伊藤唯真著作集　第一巻　H7.5　法蔵館）

③ 院政期の真言宗小野流における教学的環境の問題については、拙稿で述べたことがある。

○「十二世紀における義天版の書写とその伝持について―訓点資料を手懸かりとした諸宗交流の問題―」
(『南都仏教』第 81 号（南都仏教研究会）H14.2)

○「光明山における諸宗交流の一側面―経雅の訓点本を手懸かりとして―」
(『頼富本宏博士還暦記念論文集』 H17.12)

○「鳥羽壇所を巡る訓点本流布の問題―智積院新文庫蔵『胎蔵界念誦儀軌』を手懸かりとして―」
(『智山学報』56　H19.3)

④『CD-ROM 版 平安遺文』(竹内理三編　東京堂出版　H10.4)

⑤ 東京大学史料編纂所　http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/

⑥ 稿者 HP「顯雅房」 http://www.orcaland.gr.jp/~utsunomiya/(2003 年 1 月より運用開始)

⑦ 高橋正隆『大般若経の流布』(H7.3　善慶寺)

⑧ その画像や今までの開発の有り様は、以下の HP で窺われる。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/kakuhitu/scope.html

⑨ 美舘イメージングの HP は下記の通り。
http://www.mecan.co.jp/
また、LED 照射器については、下記に掲載されている。
http://www.mecan.co.jp/original/led/index.html

⑩ 拙稿「御嶽山清水寺蔵『妙法蓮華経』の訓点について―白点資料分析の一方法―」
(『訓点語と訓点資料』第 112 輯　H16.3)

⑪「計算機による古典籍資料の組版・印刷について」
(金水敏『訓点語と訓点資料』記念特輯号 '98・3)

⑫「聖教調査におけるデータ化について（一）―LaTeX による組版の問題―」
(『大谷女子大国文』第 30 号　H13.3)